

日文研シンポジウム「日本語で書く——文学創作の喜びと苦しみ」

Ecstasy and Agony: The Experiences of Non-Japanese Writers of Japanese Literature

【日時】2010年1月29日（金）9時～17時30分

【場所】国際日本文化研究センター 第一共同研究室

【開催趣旨】

ここ20年来隆盛になりつつある、外国人が日本語を用いる文学創作には、日本語と母語とのハイブリッド、日本語の多様化、日本語を媒介物とする日本文化と外国文化の融合などの現象が見られ、現代日本文学の新しい豊かな一側面となっている。本シンポジウムは、研究者の発表と作家の座談会を連続して行い、交流を通じて、近年の日本語文学の意義を検討し、21世紀における日本語文学の発展を展望することを目的とする。

プログラム

開会の辞 9:00-9:10 白幡洋三郎（日文研副所長）

総合司会：郭 南燕（日文研）

研究発表 9:10-12:40（質疑応答各10分）

9:10-10:00 栖原 暁（東京大学）

「留学生の日本語による文学創作の意味を考える——『留学生文学賞』の設立と発展を通して」

10:00-10:50 牧野成一（プリンストン大学）

「日本語作家は日本語をいかに異化し、多様化しているのか——リービ英雄の文学のケース・スタディー」

コーヒーブレイク 10:50-11:00

11:00-11:50 谷口幸代（名古屋市立大学）

「楊逸の文学におけるハイブリッド性」

11:50-12:40 郭 南燕（日文研）

「日本語日本文化によって広がる想像力と創造性」

昼食休憩 12:40-13:40

座談会 13:40-15:40 作家たちの座談会：日本語による文学創作の経験と展望
参加作家：田原、シリル・ネザマフィ、ボヤンヒシグ、楊天曦

コーヒーブレイク 15:40-16:00

総合討論 16:00-17:30

ディスカッサント：ジェフリー・アングルス、伊藤守幸、稲賀繁美、
鈴木貞美、トゥンマン武井典子、中川成美、細川周平